

静岡県植物調節研究会の歩み

静岡県植物調節研究会会長 太田 孝

はじめに

土地利用型農業はもちろんのこと、最近さかんである施設型農業でも、その環境制御において地域性が関連し、こと農業技術を論ずるに地域性ぬきでは出来ない。バイオテクノロジーにおいても、最終的に実用化となる段階ではやはり地域性が関与するであろう。除草剤や生育調節剤についても、その剤の作用性はもちろん、耕種の条件との適切な関連性を含め、深く地域性を持つことは読者の十分認識されるところであろう。

かつて、地方の時代という言葉がはやり、地方の時代とは、地域の特性を活かした地方での新しい試みを行うことであると言われた。そして現在試みの成果が着々と多く積重ねられてきている。

この意味で、地域において同質の目標を持ち、立場の異なる人達の討論の場の重要性は大きく、遅ればせながら発足した静岡県植物調節研究会の活動を紹介し、地域における研究活動の活発化を期待申し上げる次第です。

研究会のあらまし

本会は主として静岡県に在住する雑草防除並びに作物生育調節の研究および技術に係る者で構成し、その研究及び技術の推進と、会員相互の親和、協力を図ることを目的としている。

昭和59年4月21日、静岡市農業会館において設立総会を開き発足した。当時の県農試作物部長大橋義弘氏、同作物試験地長杉山薫氏、経済連の諸井均氏、クミアイ化学生物科学研究所の木村一郎氏をはじめとし、各機関の代表者の多くの協力によるものであった。

当初は、40～50人の小じんまりした研究会でと考え、進めていたのであるが、当日の入会会員は162人、賛助会員は17社に及ぶ大世帯となった。（昭和62年6月現在では会員201名、賛助会員20社）。役員として会長に不肖筆者が、副会長に白井農試場長、事務局長に日本植物調節剤研究協会の宮田東海支部長が選ばれた。（現在はこれに加えて、農水省果試の広瀬興津支場長を副会長として2人制で）。

幸いにして、多様化した静岡県農業に対応して、多くの試験研究機関が地域内に存在しているので、異なった立場の人が数多く会員になられた背景もある。以下会員の所属する機関名は次の通りである。

静岡大学農学部、県農林短大、国立果試興津支場、国立茶試、県農試・県茶試・県柑試の本場及び各分場、各県農林事務所（含農業改良普及所）、県農協経済連、温室農協連、造園組合連、各単一農協、植調東海支部、石原産業、ケイアイ研、クミアイ化学、加村薬局、三共、シェル化学、シオノギ、静岡兼商、ダウケミカ

ル日本、武田、中外、トモノ、トモグリーン、豊田肥料、日産化学、日星石油、日本曹達、日本特農、日本農薬、北興化学、松田屋、八州化学、理研グリーン、東海物産。

研究会の事業としては、年に2回の研究会の開催と、年2回の会報の発行が主体で、一般的な研究会とかわりはない。事務局としては、本会を永つづきさせることが最も大切と心得、発足2年目から1回は講演会を主体に、他の一回は現地視察を中心とする研究会とし、毎回懇親会を開き情報交換の場を設けた。また出席できなかった会員のために、会合の内容をまとめ会報として配布をしている。また会場は持ち廻りとし、開催機関の絶大な協力を得て実施している。

今のところ7回開催の実績を持っているが、出席者は70名を下らず、毎回盛大であるが、静岡のような田舎では、懇親会の会場探しに苦労している。経費は、入会金1,000円とし、他に開催ごとに出席者から実費主義で必要経費を徴収し、一部賛助会費で補充している。

研究会の内容

話題の項目については、除草剤と生育調節剤、総論と各論との組み合わせに、最近の国際会議報告を加えて構成するのを原則としている。しかし臨機応変の企画が必要で、今までは比較的順調であったが、今後は中～小課題への選択が必要と感じている。以下今までの実績について、課題名と話題提供者名のみをあげる。

第1回（昭59.4. 於農業会館）

- 1) 日本における雑草・植物生育調節の現状と問題点：日本植物調節剤研究協会 小沢啓男氏
- 2) 静岡県における雑草・植物生育調節の現

状と問題点：日本植物調節剤研究協会東海支部 宮田喜次郎氏

- 3) 果樹における生育調節剤利用の現状と問題点：農林水産省果樹試験場興津支場 河瀬憲次氏

第2回（昭59.11. 於県柑試）

- 1) 柑橘における生育調節剤の現状と問題点：静岡県柑橘試験場 岡田正道氏
- 2) 果樹園における雑草の生態と管理：農林水産省果樹試験場興津支場 鈴木邦彦氏
- 3) 第9回アジア・太平洋雑草学会に出席して：クミアイ化学工業㈱生物科学研究所 宮沢武重氏

第3回（昭60.7. 於県農試）

- 1) 切花保存剤の利用と効果：静岡県農業試験場 船越桂市氏
- 2) 最近における新除草剤の開発動向について：日本植物調節剤研究協会研究所 則武晃二氏
- 3) 欧州農業の現状と農薬開発の動向について：クミアイ化学工業㈱生物科学研究所 直原一男氏

第4回（昭61.1. 於県水試。現地研究会）

- 1) 水産試験場の研究、施設の概要：県水産試験場 奈良正人氏
- 2) 水試における魚貝類へい死事故対応について：水産試験場 大上皓久氏

第5回（昭61.5. 於国立茶試）

- 1) 茶園における生育調節剤の利用場面：農林水産省茶業試験場 青野英也氏
- 2) チャにおける生育調節剤検定法：農林水産省茶業試験場 酒井慎介氏
- 3) 水稻湛水土中直播栽培の現状と問題点：静岡県農業試験場 森下光宏氏
- 4) 第10回アジア太平洋雑草学会に出席して：

日本曹達榊原農場 世儀一清氏

第6回 (昭61.12. 於遺伝研。現地研究会)

1) 国立遺伝学研究所の研究概要について:

国立遺伝学研究所遺伝実験生物保存研究センター 井山審也氏

2) イネにおけるモチ遺伝子発現調節とその育種的意義: 同上 佐野芳雄氏

第7回 (昭62.6. 於果樹試興津支場)

1) 柑橘における組織培養研究の現状と問題点: 農水省果樹試興津支場 日高哲志氏

2) 果樹の枝梢管理と生育抑制剤の利用: 農水省果樹試興津支場 河瀬憲次氏

3) 水稻倒伏軽減剤の現状と問題点: 日植調研究所 横山昌雄氏

それぞれの話題提供に基づき、質疑応答がなされ、最近の動向なり問題点を把握し、また一つのことを体系的に理解を深め、会員の資質向上に役立っていると思われる。それに加えて、同じ地域で同じ植物調節の研究や技術に関与している者同志が顔見知りとなり、人間関係が良くなる懇親会の功用も大きいものと感じている。

おわりに

ありふれた研究会の紹介であったが、ごく気さくな研究会であることが特徴であろう。今後はその中で、話題内容の充実を図っていきたいと思っている。そのため、時には基礎的研究について、中央なり他のブロックから話題提供者のおいでを願うことを取りあえず考えています。

先輩格の関東や九州のブロックの雑草研究会をまねするつもりはなく、またとかく作目別になり易い研究会や検討会でなく、多くの作目関

係者を植物調節という横ひもで、地域問題のからみで、こじんまりと行うことを骨子とし、そこに意義を求めている。地域性としては自然立地条件に加えて、社会経済的条件をも配慮する必要があると今後より強くなるであろう。

かつて若い研究者のはげみの場の一つであった地域農試主催のブロック会議もなくなり、植調研のブロック検討会は委託剤が多くて時間的な余裕もなく、学会では学問的としては引け目を感じ、第一線での研究者の討論の場が求められているのではないかと感じている。案外に新しい若い研究の芽が育たない一つの理由ではないだろうか。もちろん本研究会はそんな役割を果たすに至っていないが、今後その一つの補助的効果を期待している次第です。

あえて本誌に投稿したのは、他の県でもこれに近い研究会があれば名乗りをあげて戴き、会誌の交換等情報連絡をし、若い研究者のために少しでも役立てたいと思ったからである。

最近感じている一つとして、除草剤や生育調節剤担当の研究者に、ベテランがへり、新しい若い人が増えて来たことである。これは喜ばしいことであるが、一方これらの研究者の資質の向上について、官民を問わず、各研究機関、研究協会、学会、夫々の立場において意を注ぐ必要がある。本研究会もほんの一端をにっているつもりである。

最後になりましたが、本研究会には話題提供者の派遣等、植物調節剤研究協会に御協力を戴いていることを記してお礼申し上げます。今後とも各界の御協力をお願い申し上げます。